

「お諏訪さんと共に」 初代宮司青木賢清翁を想う ～初めてご奉仕した長崎くんち～



鎮西大社 諏訪神社

宮司 いけ だ たけ やす
池 田 剛 康

昭和20年11月14日生 68歳
昭和43年 3月 國學院大學文学部神道研修科卒
同年 4月 昊天宮権禰宜に任ず
昭和54年 4月 昊天宮保育園園長に就任
平成 5年11月 昊天宮宮司に就任
同年11月 昊天宮保育園理事長に就任
平成22年 7月 長崎県神社庁庁長に就任
平成24年 3月 神職身分浄階一級
平成25年 6月 鎮西大社諏訪神社第26代宮司に就任

はじめに

私ごとですが、昨年6月1日 当神社の例大祭「長崎くんち」の始まりを告げる「小屋入り清祓い」の良き日に神社本庁より鎮西大社諏訪神社第26代宮司の任命を受け着任いたしました。

当日のご奉仕は、凜と張りつめた空気の中、紋服姿で御参列の責任役員さんを始め年番町・神輿守町・踊町の皆様の神事に臨む真摯な御姿を目の当たりにし、大変緊張もいたしました。清々しい感動と宮司としての責任の重さを実感いたしました。

諏訪神社の宮司奉仕の祭典は年間120を数え、3日に一度のペースで奉仕しなければなりません。大村の実家のお宮（昊天宮）でもここまでの祭典数はないので、歴代の宮司さん方のご苦労されたのではと存じます。

初代宮司 青木賢清を想う

さて、当神社の初代宮司 青木賢清翁を始め青木一族の御霊を慰める墓前祭を昨年10月28日にご奉仕いたしました。墓地は西山町の椿原墓地内にあり、諏訪神社を見渡せる高台にございます。26代目の宮司としての御挨拶と今後の神社の興隆を祈念いたしました。

ここで初代宮司 青木賢清翁について述べさせていただきます。

賢清は、肥前唐津の豪族草野・松浦氏の一族である青木豊前守永俊の一子で、若くから修験道の修業を積み、儒教・仏教の二教にも識見が深く、両部神道を修めた識者でございました。反面、剛健な体を持ち8尺の弓を持ち13束の矢を射ても的を外すことはなかったとされる武勇伝が残るほどの勇者であったとされます。

賢清は、寛永9年（1632）に諏訪神社初代宮司に就任し、その後青木家が社家として明治7年（1874）11代目 青木陸奥守永元宮司までの242年間続いております。

さて賢清はキリスト教伝来に伴い、社寺の破却などで変わり果てた長崎の事情を知り、長崎に神社の再興をすることに奔走いたしました。

当時は、徳川幕府による禁教令が布かれた厳戒の中、更に残されたキリスト教信者の妨害等も頻発する中、諏訪神社の再興に命がけで取り組んだと記されています。

賢清の諏訪神社再興への信念は、戦国の武将上杉謙信の戦の信念「天・地・人」（天の時・地の利・人の和）（この三つが相整ったとき、物事がうまく運ぶ）に相通ずるものがあると私は考えます。

賢清にとっての「天の時」とは、キリスト教伝来により混迷していた乱世（戦国時代）をさし、その折「天の声」（神仏の導き・危機感を抱いていた幕府と奉行所の意向）を感じたと思います。次に「地の利」とは、玉園山を幕府より下賜され、長崎の中心に位置した地の利を生かし、町民が集える荘厳な社殿を建立し環境を整えました。また、国内唯一の開国した長崎出島の特性を長崎の利益、布いては国益にもつながると考えたのでは。そして、何よりも「人の和」を大切にし、町民のコミュニティーの場所としての神社を提供することで、日本独自の共同社会の共同信仰を確立し、更に外国人の多い長崎で日本人の正道（神道）を示すことで、外国文化、取り

分け外国の宗教の不必要性を訴えたものと考えられます。

また賢清は、キリスト教伝来に伴い混迷していた長崎の町と人心を本の形と心に戻すべく、諏訪神社の祭事として最初に取り入れたのが「湯立神事」です。この神事は、盟神深湯を遺習とする神道における最も厳しい祓いの神事で、繰り返し祓うことで心身の清浄を図り、神々の御加護を得ることを目的といたします。更に、日々の暮らしの中で、常若の精神「日に日に新たに、日々清々しく」を生活の基本として実践することを説いております。



湯 立 神 事

長崎くんち

次に当神社の例大祭「長崎くんち」について所感を申し上げます。

長崎くんちは御周知の通り、6月1日の小屋入りに始まり、10月1日の事始め神事・神興守町清祓等の神事があり、10月7・8・9日の長崎くんち、そして13日の直会神事をもって終了とするという長期に亘る祭りでございます。中でも10月7・8・9日は、初めての奉仕となる私にとって壮絶なものとなりま



小屋入り

した。ここで私がご奉仕したこの3日間の祭事を簡単にご説明申し上げます。まず7日 午前2時起床（早めに床につくも、緊張ぎみとあって熟睡できず）午前5時 遷御祭（浄間のなか、神様の仮御霊代を神殿から神輿にお遷しする神事）を奉仕し、午前7時 奉納



奉納踊り立会い



流鏝馬神事

踊りの立会い（3時間踊り場にて立会い、迫りくる演しものの迫力と奉仕者の心意気に感動）午前11時30分 流鏝馬神事の立会い（156年ぶりの復活に感動）午後1時 お下り（初めての乗馬、約2時間の試練）午後3時 御神輿御着祭を奉仕 そして、午後6時 神社本庁総長様御一行と会食し午後9時、職舎へ帰宅。このように大臣並みの分刻みの予定に追われ、あっという間に一日が終わりました。

中日8日は、午前10時 神社本庁総長・石清水八幡宮宮司田中恆清様を献幣使としてお迎えし、昨年新築されたばかりの御旅所において例大祭を奉仕いたしました。年に一度の重儀として皇室・国家の御安泰と氏子の皆様の幸せをお祈りいたしました。



例大祭終了後、田中総長と



新築された御旅所

正午 例大祭直会、午後2時 特別崇敬者清祓（湯立神事）をご奉仕しこの日は終わりのと思った矢先、台風24号接近に伴い、御旅所の台風対策、明日の諸行事の決行・中止に関わる諸会議が行われ、その対応に追われテンヤ・ワンヤとなった次第です。会議の結果、後日9日の諸行事は全て10日に順延となり、御旅所は建設業者の尽力で早急に台風対策を行い、事故・被害も出ずに安堵いたしました。台風一過となった10日は、午前6時 発御祭（神様に本社への御帰りを告げる祭典）の奉仕、午前7時 御旅所での奉納踊り立会い、午後1時 お上りと続き、午後4時 最後の祭典となる還御祭（御神輿から神殿に神様をお遷しする祭儀）をご奉仕いたしました。3



奉納踊り 鯨の潮吹き



奉納踊り 御朱印船



騎乗してのお上り

日間の全ての祭儀をつつがなくご奉仕できましたことは、何よりも神様の御加護と神社関係者の格別のご高配の賜物だと心より感謝申し上げます。

この3日間数々の祭事・行事の中で特に感銘を受けたことは、くんに携わる全ての人々が同じ気持ちでいること。2、3歳の子供から古老までが、「お諏訪さん共に」「お諏訪さんのために」という一つの心になっていること。これが「くんち」だと感じました。

またある宴席で、長崎の古老から興味深いお話を伺いました。

長崎の人の誉れとは、「お諏訪さんと共にくんちを通した人生を送ることですよ」と申されました。これを詳しくお聞きすると、この世に生を受け家族と共に「初宮詣り」この時初めてお諏訪さんとの関わりが始まり、そして七五三。その頃、住んでいる町が年番町であれば、お下り・お上りのお供の機会に恵まれ、踊町であれば、先曳きとして奉納踊りの一端を飾ります。次に小中学生時代に演し物の囃子方、そして成人を迎えいよいよ根曳きを経験し、厄入り前後に踊りの長采など責任者として奉仕します。全てを経験した後、

還暦前後に町の役員として奉納踊り全般のお世話をします。そして、くんち当日紋付姿で踊り場から神社に向かって拝礼することが長崎の人の誉れであり、すごろくに例えれば上がりであると説明されました。長崎の人たちは人生そのものがくんちの中に存在すること伺い深い感銘を受けた次第です。

また、江戸時代のくんちの様子を描いた屏風には、正面に袴をつけた長崎奉行がいて、右側に中国人が辮髪姿で、左側にオランダ人が軍装姿でくんちを拝観しています。徳川幕府が諏訪神社の大祭を奉行所の大きな外交手段として関わってきたことを示すと共に、諏訪の神を主神とする武の神を祀り、外国人に対して祭りと言う文化で接し、平和的な民族であることをアピールすると同時に日本文化の独自性を示していたと考えられます。

長崎くんちは、昔も今も変わらぬ姿を残しております。それは先人たちが長い年月をかけて英知を重ねそして、町ごとの伝統を築き上げ、その中に生きる精神と技量を子や孫に伝え導いて来たからこそ今に引き継がれています。

長崎っ子が3人寄れば「くんちの話」と云うくらい、熱意をもって守り伝えられ、勿論それは、敬神の誠心によって支えられていることは論を待たないところです。

祭りという日本の伝統行事は、単なる経済的な裏付けだけで支えられるものではなく、その神髄に敬神の念が脈々と伝わってこそ伝統行事と言えます。

特に奉納行事などは、氏子も歓喜し拝観者

にもその感動を与えるものであり、長崎くんちは正にその代表的な祭りと言え、日本三大祭りの一つとされる所以でもあります。

更にこの長崎くんちは、長崎における地域文化の核となる祭りであり、共同社会の共同信仰として実践しておられる氏子の皆様に満腔の敬意を表したく存じます。

諏訪神社の名所

次に、現在の諏訪神社の名所やユニークな狛犬たちをご紹介します。

諏訪神社の神様の御利益として、諏訪の神は「武の神・厄除け」森崎の神は「万物創世の神・縁結び」住吉の神「海の神・航海安全・大漁満足」となっています。

先ずご紹介するのは、森崎の神の御利益に肖った「陰陽石」です。

参道の敷石には、男石（二の鳥居付近）と女石（三の鳥居付近）が幾何学的な文様で埋め込まれており、男性は女石、女性は男石を踏んだ後、拝殿前の両性が合体した石を踏んで参拝すると、縁結びの願い事が叶うと云われております。参道が整備された江戸時代にこんなロマンチックなことを考えたとは驚きです。



陰陽石 男石



陰陽石 女石



両性合体石

次に当神社のユニークな狛犬たちをご紹介します。

まずは「止め事成就の狛犬」です。拝殿右側の階段下に置かれ、「止事に霊験あり」と古より伝わっており、備え付けのコヨリを狛犬の足に結び、禁酒・禁煙・受験のすべり止め等の祈願をする狛犬です。



止め事成就の狛犬

次に「高麗犬の井戸・銭洗いの井戸」です。拝殿の左後ろにあり、この狛犬の口から湧き出るお水でお金を洗うと倍になると云われ、更にこのお水を飲むと安産に恵まれると伝えられています。



高麗犬の井戸

また、拝殿右側の後ろにある「願掛け狛犬」は、台座に置かれた狛犬をぐるぐる廻して心願を祈念します。他にもユニークな狛犬たちが点在しますので、お楽しみいただきたいと思います。



願掛け狛犬

次に諏訪神社の末社としておまつりする「玉園稲荷神社の災難除けの蛙岩」をご紹介します。この岩は、はるか昔は稲荷神社の上の方にあり、岩の形から「かえる岩」と呼ばれ、信仰されていました。

昭和57年夏の長崎大水害の際、稲荷神社の裏山が崩れ、かえる岩も神社近くまですべり落ちましたが、神社への土砂をくい止め社殿をお守りしました。このことから、災難除けの蛙岩として信仰されています。



かえる岩

また、諏訪神社のご神域は樹齢500年以上の楠が何十本も樹生しており、春先の落ち葉掃除は大変ですが、初夏の新芽が生えそろった時期は最高です。新緑に覆われた神社を是非ご参拝いただきたいと思います。

結びに

正月は25万人を超える参拝者で賑わいます。7日の七草粥はとてもおいしいと評判です。鬼は外、福は内、2月の節分行事・4月の花まつり（献華式）・6月には小屋入りと夏まつり・そして、10月の長崎くんち・11月には七五三詣りに新穀感謝のおまつり・12月には



正月七草粥

大注連縄奉製に餅つきや大祓式等の年末行事と一年中氏子の皆様と共に諏訪神社の祭事は成り立っています。

本年正月より、月毎の祭事をご紹介する掲示板を新たに拝殿横に設置いたしましたので、各祭事へのご参拝を心よりお待ち申し上げたいと存じます。

結びといたしまして、諏訪神社の歴史と伝統を後世に確かに伝えていくことが今の私の使命であると考えます。

お諏訪さんと共にご奉仕できる喜びを感じながら、皇室の弥栄と国の安泰、神宮を始めとする神社の隆昌と氏子の皆様の幸せを心から祈り続けて参りたいと存じます。

今後とも皆様方の暖かいご支援とご協力を賜りますよう宜しくお願いを申し上げます。



諏訪神社全景